



随筆・評論

はによしかず
羽仁吉一

防府市
(1880～1955)



『雜司ヶ谷短信』上巻より

【著作】

『雜司ヶ谷短信』上下巻(昭和31・婦人之友社)
『我が愛する生活』(昭和60・自由学園出版局)
『自由人をつくる 南沢講和集』(羽仁もと子と共著)
(平成3・自由学園出版局)

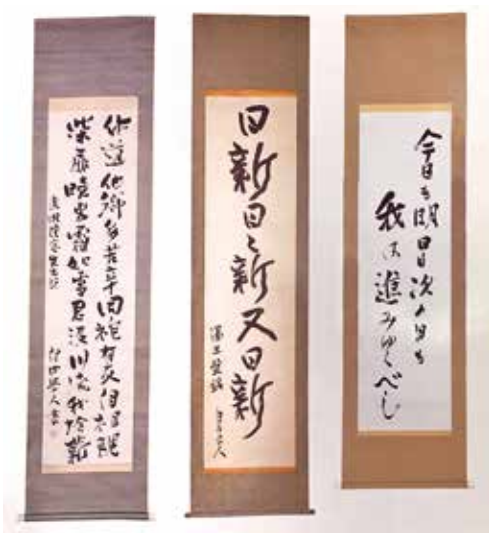
【閲覧情報】

重要文化財 自由学園明日館



羽仁吉一の家族(1913年頃)

左から 妻もと子、長女 説子、母 イヨ、三女 恵子、父 鶴助、吉一
(『我が愛する生活』昭和60年・自由学園出版局刊に掲載)



羽仁吉一 座右の書

(左端の書は、吉一が愛誦した広瀬淡窓の漢詩)
(『自由学人 羽仁吉一』平成18年・自由学園出版局刊に掲載)

羽仁吉一 年譜

明治13(一八八〇)年	五歳
明治18(一八八五年)	九歳
明治22(一八八九年)	一〇歳
明治23(一八九〇)年頃	一三歳
明治26(一八九三年頃)	一六歳
明治29(一八九六年)	一七歳
明治30(一八九七年頃)	二〇歳
明治33(一九〇〇)年	二二歳
明治34(一九〇二年)	二二歳
明治35(一九〇二年)	二三歳
明治36(一九〇三年)	二六歳
明治39(一九〇六年)	二七歳
明治40(一九〇七年)	二八歳
明治41(一九〇八年)	二九歳
明治42(一九〇九年)	三三歳
大正2(一九一三年)	三四歳
大正3(一九一四年)	三五歳
大正4(一九一五年)	四〇歳
大正9(一九二〇)年	四一歳
大正10(一九二一年)	四三歳
大正12(一九二三年)	四五歳
昭和5(一九三〇)年	五二歳
昭和7(一九三二年)	五二歳
昭和16(一九四二年)	六一歳
昭和26(一九五二年)	七二歳
昭和30(一九五五年)	七五歳

5月1日、山口県佐波郡三田尻村(現・防府市)に生まれる。父鶴助、母イヨの長男。羽仁家は毛利家に仕えた士族。鶴助は明治維新後も毛利家に仕えていたという。

5月1日、華浦小学入学。

3月29日、華浦尋常小学校卒業。

私立周陽学舎(現・山口県立防府高校)入学。

私立周陽学舎中退。この頃 華浦尋常小学校同窓生と同人雑誌『学華雑誌』を発行。地方新聞に寄稿。

3月、実業家・発明家であった柏木幸助を社主とする『防長実業新聞』が発刊、その編集に従事する。

上京、矢野龍溪(小説家・政治家)のもとで書生となる。

2月、矢野龍溪の紹介で報知新聞社入社。

1月、『報知新聞』編集長となる。12月、『報知新聞』記者松岡もと子(本邦初の女性新聞記者)と結婚。報知新聞社から、新潟県の『高田新聞』主筆支局長に転勤となる。もと子は退社。

5月、『高田新聞』退社。(明治36年退社説あり)

4月3日、雑誌『家庭之友』創刊(羽仁吉一・もと子)。内外出版協会発行。明治40年12月終刊。10月、『電報新聞』編集長となる。同紙は11月23日創刊。

4月、雑誌『家庭女学講義』創刊(羽仁吉一・もと子)。明治40年12月終刊。12月、『電報新聞』が経営難により『大阪毎日新聞』に吸収され、『毎日電報』と改称。

6月、『毎日電報』退社。11月、雑誌『青年之友』創刊(羽仁吉一・松岡正男)。内外出版協会発行。明治41年12月終刊。

1月、雑誌『婦人之友』第1号発刊(羽仁吉一・もと子)。

婦人之友社設立。(羽仁吉一・もと子)。

東京・雜司ヶ谷に婦人之友社社屋を建設。

4月、絵雑誌『子供之友』創刊(羽仁吉一・もと子)。昭和18年12月終刊。

4月、少女雑誌『新少女』創刊(羽仁吉一・もと子)。

1月、少女雑誌『新少女』を『まなびの友』改題(羽仁吉一・もと子)。大正10年12月終刊。

4月15日、羽仁吉一・もと子、東京・目白に自由学園を創立。

9月、関東大震災罹災者のための援助活動を行う。

11月、『婦人之友』読者の会、「全国友の会」創立。

10月、『婦人之友』巻末に「雜司ヶ谷短信」の連載開始。絶筆となった昭和30年11月号分まで、23年間書き続けた。

自由学園那須農場開墾。

自由学園創立三十周年記念式典。その記念として、学園協力会から神奈川県二宮に休養のための家を贈られ、「友情庵」と名づける。

10月26日、二宮の「友情庵」にて、心筋梗塞のため急逝。

羽仁吉一

羽仁吉一は、明治後期から昭和の戦後にかけて、ジャーナリスト・出版人・教育者として、それぞれの分野に独自の領域を開拓した先駆者である。

吉一は明治十三年(一八八〇)五月一日、佐波郡三田尻村(現在の防府市三田尻)に生まれた。

華浦尋常小学校卒業後、明治二十三年(一八九〇)頃、私立周陽学舎(現・山口県立防府高校)に入学、ここで豊後日田・咸宜園の広瀬淡窓の流れをくむ今川岳南らの教えを受け、漢学を修めた。同二十六年(一八九三)頃周陽学舎を中退した後、華浦尋常小学校の学友たちと同人誌『学華雑誌』を作ったり、地方新聞に寄稿したりしたと言われている。

明治二十九年(一八九六)三月一日、実業家にして発明家であった柏木幸助を社主とする『防長実業新聞』が発刊、吉一は十五歳でその編集に従事した。

この年の十二月、日本初の女性記者(『報知新聞』記者)松岡もと子(本名もと)と結婚。吉一は二十一歳、もと子は二十八歳であった。社内結婚を理由に、吉一は新潟県の『高田新聞』主筆支局長への転勤を命ぜられ、もと子は退社した。

翌年の明治三十五年(一九〇二)五月、『高田新聞』を退社(明治三十六年退社説あり)。一時読売新聞に勤めた後、同三十六年(一九〇三)十月、『電報新聞』編集長に就任している。『電報新聞』は明治三十九年(一九〇六)十二月に『毎日電報』と改称、吉一は同四十年(一九〇七)六月退社した。

これに先立つ明治三十六年(一九〇三)四月三日、羽仁夫妻は雑誌『家庭之友』を創刊している。明治三十九年(一九〇六)四月、『家庭之友』に付随する雑誌として『家庭女学講義』を発刊し、同四十年

(一九〇七)十一月には、妻もと子の弟松岡正男とともに、文芸思想誌『青年之友』を創刊した。

翌年の明治四十一年(一九〇八)一月、『家庭女学講義』を改題し、この時廃刊した『家庭之友』も継承する雑誌として『婦人之友』第一号を家庭之友社から発刊。社名も間もなく婦人之友社と改称し、吉一は妻もと子と協力し、社主として終生その経営・編集の任に当たった。

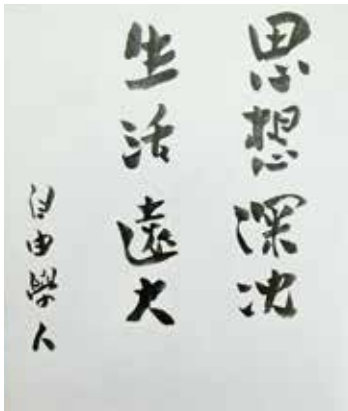
羽仁夫妻は大正三年(一九一四)四月、絵雑誌『子供之友』を、また翌四年(一九一五)四月には少女雑誌『新少女』も創刊した。

そして大正十年(一九二一)四月、夫妻は東京目白に自由学園を創立。西欧のキリスト教的自由主義思想に基づく独自の個性重視教育を開始した。

昭和七年(一九三二)十月、吉一は『婦人之友』に随想「雜司ヶ谷短信」の連載を開始し、戦後の昭和三十年(一九五五)十一月号まで書き続けた。毎号巻末に置かれた、約千字の無署名の随想文である。世に軍国主義の色が濃くなってからも、軍部の圧力を巧みにかわしながら、吉一独自の論調を貫き通した。

昭和三十年(一九五五)十月二十六日、吉一は神奈川県二宮町の別荘友情庵で、心筋梗塞のため急逝した。

(文・森川信夫)



羽仁吉一 座右の書
(自由学人は吉一の号)
(『雜司ヶ谷短信』下巻・昭和31年・婦人之友社刊に掲載)